



**オペラ** チューリヒ歌劇場の  
《リナルド》と《カルメン》

新シーズン開幕直前のチューリヒから、前シーズンの最後を飾った2つのオペラを振り返ってみたい。

ヘルツォーク演出の《リナルド》では、ビジネスマンの商戦に読み替える演出が、ヘンデルの琴線に触れる音楽を多少邪魔してしまったよう

だ。しかし舞台が進むと、クリスティ指揮の音楽も深みを増していった。題名役のジュリエット・ガルスティアンはアルミレーナのアン・ヘレン・モエンと並んでバロックの魅力を伝える歌唱が光ったほか、アルミーダのマリン・ハルテリウスは悪女を好演し、スープレット役脱皮に成功していた。アルガンテ役のルーベン・ドロールは素質があるだけに、声を張り上げるなどの反バロック・スタイルが残念だったが、最終的には満足のいくオペラに仕上がっていた。

これに対して、カザロヴァの題名役デビューで話題になった《カルメン》は、当たり役かどうかは別として、彼女の持てるすべての物を、使い切って最善を尽くしていたと言える。低音では彼女独特の掘り下げのような声で、高音はソプラノのような柔らかさ、言葉たて、細かい部分まで練り上げられた彼女の作品は、努力家の彼女を証明するようで非常に興味深い。音楽的ラインとしては、つぎはぎのパッチワークのようでもあった。一番の問題は彼女の声がか全開のまま長いフレーズに耐えられないところであり、ハバネラでは類を見ないような緻密な表現でカバーしていたが、カルタのアリアなど、悲劇的表現の深く長いフレーズは無理があった。ヴェルザー=メストにとっては音楽監督として最後のプレミエであったが、マーチのように始まった前奏曲を始め、テンポが走るくらいがあった。演出も兵隊が警官に読み替えられているのに、レイ演じるミカエラを裸同然にしたり、解せない部分が多かった。この舞台で唯一、聴衆を感動させられたのはカウフマンだろう。ドイツ的ではあるし、演出家の意向で、重度のマザコンに仕立て上げられたホセに似合う弱々しいホセだったが、どのフレーズも彼の血肉となり、その上に冷静に激情を被せたような独特の表現で、アリアなど観客の誰も身動きすらさせなかった。

ちょうどスイス、オーストリア共同主催で行われたサッカーのヨーロッパ杯の後だったので、広場に設置された大スクリーンがオペラにも生かされ、初日の公演が時間差でライブ上演された。従来の観客層でない

聴衆を取り込めるよい企画であった。  
(中 東生)

